
幻夢抄録 目覚め 7章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録　目覚め　7章

【Zコード】

Z0879A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

氷魚と瑪瑙の前に、突如、現れた敵。彼女は、氷魚の、本当の母親を知つていて……？

追手（前書き）

「無沙汰しておつまとして、どうも、維用です。
今日はやばい、です。氷魚。ピンチ！
独特の世界観を、楽しんで読んでみてください。」

氷魚が、村に来てから、七日が過ぎた。

村人との折り合いもよく、子供たちとも、すぐに仲良くなつた。今、彼女は出かけていて、いない。

村の女たちと一緒に、楊梅の収穫をするといつていた。しかし、そんなに時間のかかる、作業ではないはずだ。もうすでに、日が傾きかけている。

痺れを切らした瑪瑙が、腰を浮かせたとき、畠の脇を、大きな籠を抱えた氷魚が走ってきた。

「おーい、瑪瑙！」

息を切らして、氷魚は籠をおろす。

「「めんね、遅くなつちゃつて。見てつ、こんなにたくさん貰つちやつた」

「つたく、心配かけんじやねえよ……」

ため息をついて、瑪瑙は、氷魚の髪をくしゃくしゃとかき混ぜた。

「うん、ごめん……」

屋根にとまつていた鴉の、漆黒の瞳が、氷魚だけを、じつと、見つめていた。

音をたてずに、屋根から羽ばたき、一人の上空を旋回すると、軽やかに飛び去つていった。

鴉は、遙か彼方まで広がる、平野を見渡してから、瞬き、そして、墜ちた。

次に目を開くと、そこは、豪奢な装飾が施された部屋だつた。

「『あれ』の娘が戻つたのは、間違いないようね……まだ、完全に目覚めてはいないうだけど

「奥方さま、いかがなさいました？」

扉の外で、臣下が訊く。

「いいえ、なんでもないわ。古い知人に、置きみやげをしてきただけ…」

「では、ついに…見つかったのですね？」

「ええ…ようやくね、フフフ…あの小娘、眞実を知つたら、どんな顔をするのかしら」

謎の女は、扇を片手にあおぎ、口もとに、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「あらっ？」

氷魚は、か細い鳴き声を聞いて、外に出た。

「おい、なんだよ急に…」

ことの最中に、外に出た氷魚に悪態をつく瑪瑙。

「子猫だわ…降りられないみたい」

氷魚が、指さした場所には、茶色い毛玉のよつな物がいた。

「猫なんだから、ほつといても降りられる」

「でも、かわいそうじゃない！あたし、行つてくるつ」

「お、おいつ、氷魚！」

氷魚は、木に登り始める。

「待つてね、もう少しで届くから…」

伸ばそうとした、その手を、子猫はひっかいた。

「痛つ！怖がらなくともいいよ、おいで」

「バカな娘よ、わざわざ殺されに、登つてくるなんてね」

爪についた血を舐めてから、猫は、鼻で嗤つた。

嗤つた声は、少女の声だった。

「え…っ」

「見れば、見るほど似てるよ…お前の母親にねえ」

そう言つて、猫は、急に飛び退いた。

するり、と瑪瑙の斬撃をよける。

「だから言つたろうがっ！猫に、口クな奴あいなつてつ」

「瑪瑙…」

「お前は下に降りてろ、てめえ、コラ！氷魚に傷つけやがって、切り刻んで、煙の肥やしにしてやるうか！」

「ふん！『ご免だね、今日は、ちょっとした挨拶代わりさつ、まつたく』『あの方』もお優しいこつたよ、じゃあなた！」

飴のように、空間を歪ませて、猫は消えた。

「チツ！逃げ足の早い…氷魚、大丈夫か！？」

「う、うん…」

「傷見せろ、膿むといけないから」

「…」『めん、なさい』

「あ？ いいよ、謝るなって…どした？氷魚

氷魚は、腕を押されて、俯いていた。

「どうした、傷が痛むのか？」

氷魚は、かぶりを振った。

「あの猫、あたしの母さんを、知つてたみたいだつた。あたし、なんにも知らない。兄さんが死んだのも、聞かされるまで、知らなかつた…自分の家族のことさえ知らないなんて、なんか…情けない」

「仕方ないことだつてある、気にするんじゃねえよ」

「ねえ、瑪瑙は…あたしの母さんを知つてる？知つてたら、教えて欲しいの」

「…中に入ろう、冷えてきた」

「うん」

眞実（前書き）

母親に会いたがる氷魚。しかし、彼女の前に、冷たい眞実の壁が立ちはだかる…！？

うち拉がれた氷魚は、倒れてしまった。

眞実

「これでよし」と

瑪瑙は、氷魚の手首に巻いた、包帯を結んで言った。

「ありがと…瑪瑙、あたし

「ん?」

「なんでもない…話して?」

静かに頷いて、瑪瑙は話し始めた。

「師匠…お前の母さんは、俺と柘榴の、剣の師匠だった。父親の方の話は分からねえが、とにかく気が強くてな、俺たちは叱られてばっかだったよ」

「あたしに、似てる?」

「似てる、髪の色も、性格もそっくりだ」

「ねえ、今はどこにいるの?会いたいなあ

「そうか…そう、だよな」ふ…と、瑪瑙は、宙を見あげた。

「え?」

「いや、また明日な…今日は、もう休もうぜ?」

瑪瑙は、そつと氷魚を抱き寄せた。

「瑪瑙…まだ、起きてる?」

もぞもぞ、と寝返りを打ち、氷魚は、そつと話しかけた。

「どうした、眠れねえのか?」

「うん、なんか…目が冴えちゃって」

余程、母親に会いたいんだから、興奮気味に語り彼女を、瑪瑙は、悲しませたくはなかった。

「「」めん…」

「どうしたの?瑪瑙?」

「「」めんな、「」めん…」

瑪瑙は、ただ、氷魚を抱き締める」としかできなかつた。

真実を知れば、彼女が悲しむのは、目に見えている。できるなら、なにも、知らせたくはなかつた。

「苦しいよ、瑪瑙」

「氷魚…」

朝焼けが、地平を赤く染めていく…
夜が、明ける。

「氷魚、ホントに…会いたいのか？」
躊躇いながら、瑪瑙は聞いた。

「うん、どうして？」

「わかつた…ついて…」

「う、うん…」

朝焼けの道を、二人は、さらに村の奥に向かつて歩き出した。

「なんか、寂しい所ね、ねえ、瑪瑙」

「ああ…」

「ねえ、どうしたの？」

怪訝そうに、氷魚は首を傾げる。

「ついた、ここだよ」

氷魚は、その光景に、絶句した。

「ここ…お墓」

森の奥深く、下草が刈られ、よく手入れされた、墓地が広がつていた。

「ここちだ、氷魚」

墓石の脇を通り、瑪瑙は進んでいく。
瑪瑙は、氷魚を振り返つて、足を止めた。

「ここが、柘榴の墓だよ」

「刀だけの墓？」この一つだけ。…ね、まさか、まさか隣の墓つて…！」

？」

「すまない、氷魚…すまないっ」

「お母さん、なの？」

「刀と、片腕しか戻つてこなかつたんだ」

「そ……そんな、どうして……どうしてこんなつーひどい、ひどいよつ」

「氷魚ツ！」

傾いだ氷魚を、瑪瑙は慌てて抱き留める。

「しつかりしろ、氷魚つ、氷魚つ！？」

瑪瑙は、氷魚を抱えて、必死に村へと走つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879a/>

幻夢抄録 目覚め 7章

2010年10月11日19時33分発行